

せかいのともだちとキラリ

【実践者】

氏名	宮本 渚	
学校名	茨城大学教育学部附属小学校	
対象学年	第2学年(100名)	
担当教科等	外国語	
実践年月日もしくは期間(時数)	2025年9月～10月(6時間)	

【実践概要】

1. 実践する教科・領域

外国語科、学級活動、道徳 C-(16)国際理解、国際親善

2. 単元名と単元目標

① 単元名

せかいのともだちとキラリ

② 単元のねらい

他国の人々や文化に親しみをもち、自分たちと異なる文化のよさに気付いて、積極的に関わっていかうとする態度を育てる。

③ 関連する学習指導要領上の目標

(「第3章 特別の教科 道徳」の「第1 目標」)

第1章総則の第1の2に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

3. 単元の評価規準

(道徳のため、評価規準はなし)

4. 単元設定の理由・単元の意義

① 単元設定の理由

これからの時代を生きる子どもたちにとって、国や文化の異なる人たちと関わって生活していくことが必然となってくる。しかし、子どもたちが日常生活で国や文化の異なる人たちと関わる機会は多くない。そこで、小学校低学年の段階から、異なる国や地域の人々の暮らしや考え方にふれる機会を意図的に設定することで、違いを受け入れる土台づくりをしていく。そして、子どもたち

が国や文化の異なる人たちとどのように関わっていくかを自分事として考えられるようにしたい。

② 単元の意義

子どもたちが異文化を体験的に学ぶことで、世界にはいろいろな人がいることに気付き、共生社会の基礎となる多様性を尊重する心の育成につながると思う。世界の人々の生活を知ること、自分たちと同じところ、違うところを感じ取り、他者への共感性が育ったり、日本のよさや自分たちの生活の特徴などの自国の文化への気付きにつながったりするだろう。また、遠い国に住む子どもも同じように遊んだり笑ったりしていることに気付くなど、世界とつながっている感覚を育むことは、「地球市民」としての感覚の芽生えにつながり、本単元の学習を行う意義があると思う。

③ 児童観

子どもたちは1年生のときから、2週間に1回外国語活動の授業を行っている。外国語での活動にも意欲的に取り組み、楽しんでコミュニケーション活動を行う姿が見られる。しかし、小学校低学年の子どもたちにとって、日本以外の国は知らないことも多く、遠い存在である。日常生活で国や文化の異なる人たちと関わる機会は少なく、自分事として国や文化の異なる人たちと関わることについて考える経験も乏しい。そのため、本単元を通して、子どもたちが体験的に異文化にふれ、自分たちと同じところや違うところ、自分たちも世界とつながっているという感覚に気付くきっかけとしたい。

④ 指導観

本単元の導入として、子どもたちが楽しみながら世界にはいろいろな国や文化があることを知ることができるよう、世界一周旅行クイズを行う。そして、ウガンダやアフリカの文化を実際に体験したり、ウガンダの写真を用いて日本と比較したりすることで、自分たちと同じところや違うところに気付くようにする。また、子どもたちにとって身近であり、文化の違いが大きく表れる食事場面を通して、国や文化の異なる人たちと仲良くするために大切なことについて考えさせる。その際、これまでの学習を想起させたり、「外国からの転校生がきたらどうするか」などを子どもたちに問いかけてすることで、子どもたちが自分事として捉えられるようにしたい。さらに、これまでの学習で学んだことや考えたことを実践する場として、ウガンダの子どもたちとオンラインで交流する場を設ける。実際に交流することで、異なる国や文化の人たちとも積極的に関わろうとする姿勢を日常生活へもつなげていきたい。

5. プログラム計画

回	テーマ ねらい	方法・内容	使用教材等
1	○せかいにはどんな国があるのかな ねらい:様々な国のあいさつや食べ物などに親しむことを通して、世界にはいろいろな国があって、いろいろな文化があることを知る。	世界一周旅行クイズ(様々な国の「国旗」「あいさつ」「食べ物」「有名なもの」)を行い、世界の国々とその文化にふれる。 ※日本、アメリカ、ブラジル、オーストラリア、中国、フランス、エジプト、ウガンダ	・スライド資料 ・振り返りシート
2	○ウガンダのぶんかを体けんしよう		・スライド資料

・ 3	ねらい:ウガンダの生活や文化(音楽、服装など)にふれることを通して、ウガンダの文化に親しみをもつ。 ※ゲストティーチャー	①ウガンダの生活の様子の写真やチガンダダンス、ウガンダのお金、アフリカ布の服などを実際に見たり、アフリカの楽器や水運び、ものを頭に掛けて運ぶ体験をしたりする。 ②紙芝居を通してアフリカ布について知り、アフリカ布でしおりを作る。	・チガンダダンス動画 ・ウガンダのお金 ・アフリカクラフト ・アフリカ布の服 ・アフリカの楽器 ・たらい、かご ・タオル ・お手玉 ・ウォータータンク ・振り返りシート
4	○同じところやちがうところはどこかな ねらい:写真を通して、ウガンダと日本の文化に共通点や違いがあることを知り、ウガンダへの親しみをもつ。	グループに2枚ずつ写真を提示し、日本に住む自分たちの生活と似ているところや違うところを見付ける。その後、全体で気付いたことを共有する。	・ウガンダの写真 ・ワークシート ・ウガンダの子どもたちからのメッセージ ・振り返りシート
5 本時	○せかいのともだちとなかよくなるにはどうすればいいかな ねらい:他国の人々や文化に親しみをもち、自分たちと異なる文化のよさに気付いて積極的に関わっていくとする態度を育てる。	読み物資料「となりのジェニーちゃん」(学研①)や写真資料(日本とウガンダの食事場面)を通して、異なる国や文化の人たちと仲良くするために大切なことを考える。	・読み物資料「となりのジェニーちゃん」(学研①) ・日本の食事場面の写真 ・ウガンダの食事場面の写真
6	○ウガンダのともだちとなかよくなれるかな ねらい:あしながウガンダの子どもたちとのオンライン交流を通して、文化の異なる人たちと積極的に関わろうとする実践意欲を育てる。	あしながウガンダ子どもたち(Primary 2)とオンラインで交流を行い、お互いに質問をし合う。 ※後日、日本の歌を歌った動画を送る。	・振り返りシート

6. 本時の展開

時間	第5時		
本時のねらい	読み物資料や写真資料から、異なる言語や文化で暮らす人々と仲良くするにはどうすればよいかを考える活動を通して、他国の人々と進んで関わり、よりよい関係を築こうとすることの大切さに気付き、他国の人々や文化に親しもうとする心情を育てる。		
過程(時間)	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入(3)	1 学級活動で行った「ウガンダと日本のくらし」を振り返る。	・学級活動で考えたことを想起させ、他国や他国の人々との関わりを自分事として捉えられるようにする。	
展開(10)	2 「となりのジェニーちゃん」を読み、なぜ言葉が通じない二人が仲良くなれたのかを考える。	・理由を考えさせるとともに、「自分だったらどうするか」を問うことで、他国の人々と関わることよさや、実現の難しさなど	【資料1】読み物資料「となりのジェニーちゃん」(学研①)

		について、多様に考えることができるようにする。	
展開 (20)	<p>3 ウガンダと日本の食事の場面を比較し、気付いたことを交流する。</p> <p>4 食事の文化が異なる人々と、仲良く食事をするためにはどうすればよいかを考える。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <p>ぶんかがちがう人たちとなかよく食じをするためには、どうすればいいかな。</p> </div>	<p>・「食事の仕方が変だよ」と言われたときの気持ちを考えさせることで、仲良く食事するにはどうすればよいか、次の課題につなげられるようにする。</p> <p>・仲良く食事をするためにはどうすればよいかを考えさせることで、異なる文化を受け入れたり、お互いの文化を認め合ったりすることの大切さに気付かせる。</p>	【資料 2】 ・日本の食事場面の写真 ・ウガンダの食事場面の写真
まとめ (7)	<p>5 言語や文化が異なる人々とのかかわりについて、自分の考えをもつ。</p> <p>●ほかの国の人たちとどのようにかかわっていきかな。</p>	<p>・ウガンダと日本のつながりを想起させたり、「他の国からの転校生が来たときにどうするか」を問うたりすることで、自分事として捉えられるようにする。</p>	

7. 評価規準に基づく本時の評価方法

ノートの記述や発言からみとる。

8. 学校外との連携

- ・ガーナ出身の方をゲストティーチャーに招き、アフリカの楽器を持ってきていただき、実際に演奏していただいたり、演奏の仕方を教えていただいたりした。
- ・あしながウガンダの子どもたちとのオンライン交流を行った。

9. 児童の学びの軌跡

【第 1 時の振り返り】

外国語活動「せかいにはどんな国があるのかな。」

- ・世界にはいろんな国があって、もっと他の国を知りたいです。たくさんの種類の食べ物があることが分かりました。今後は、他の国のあいさつも使ってみたいです。
- ・国が違うとあいさつも違うことが分かりました。おいしそうなお飯がいっぱいで食べてみたいと思いました。
- ・いろいろな国には聞いたこともないいろいろな言葉があって、とてもおもしろいなと思いました。今日学んだことを生かして話せたらいいなと思います。
- ・世界のことがいろいろ分かってよかったです。ウガンダに行ってみたいです。鳥が好きなのでいっぱい見に行ってみたいです。宮本先生の話ももっと聞きたいです。
- ・世界にはたくさんの国があって、想像以上にすごかったです。ウガンダのことをもっと知りたいです。

【第 2・3 時の振り返り】

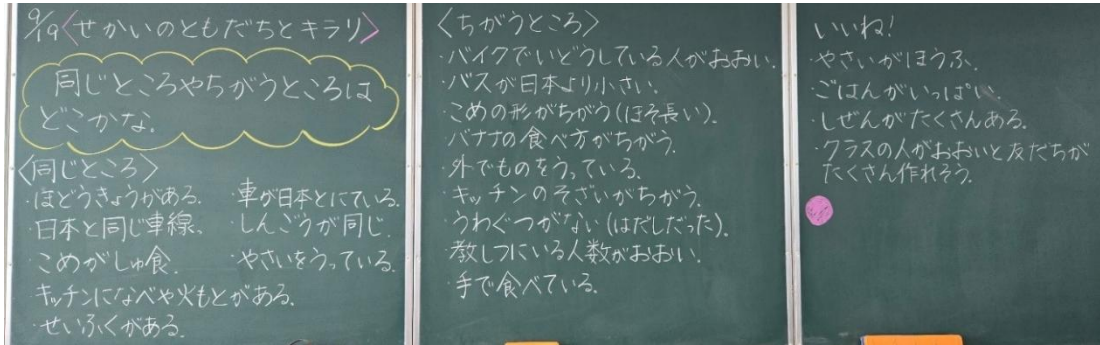
学級活動「ウガンダやアフリカのぶんかを体けんしよう。」

- ・体験をして印象に残ったのは、水運びです。なぜかというと、重くて大変だったからです。もっとウガンダの生活や学校での生活を知りたいです。

- ・私が体験をして印象に残ったことは、楽器を鳴らしたことです。なぜなら、ゲストティーチャーの先生に音の出し方を教えてもらって、鳴らしたら、すてきな音がでたからです。
- ・体験をして印象に残ったことは、チガンダダンスです。もっと知りたいことは、ウガンダのダンスです。なぜなら、チガンダダンスを踊って他のダンスも踊ってみたいになったからです。
- ・体験をして印象に残ったことは、アフリカ布でしおりを作ったことです。なぜかということ、いろいろな色のアフリカ布がきれいだからです。そして、もっとウガンダのことを知りたくなりました。

【第4時の振り返り】

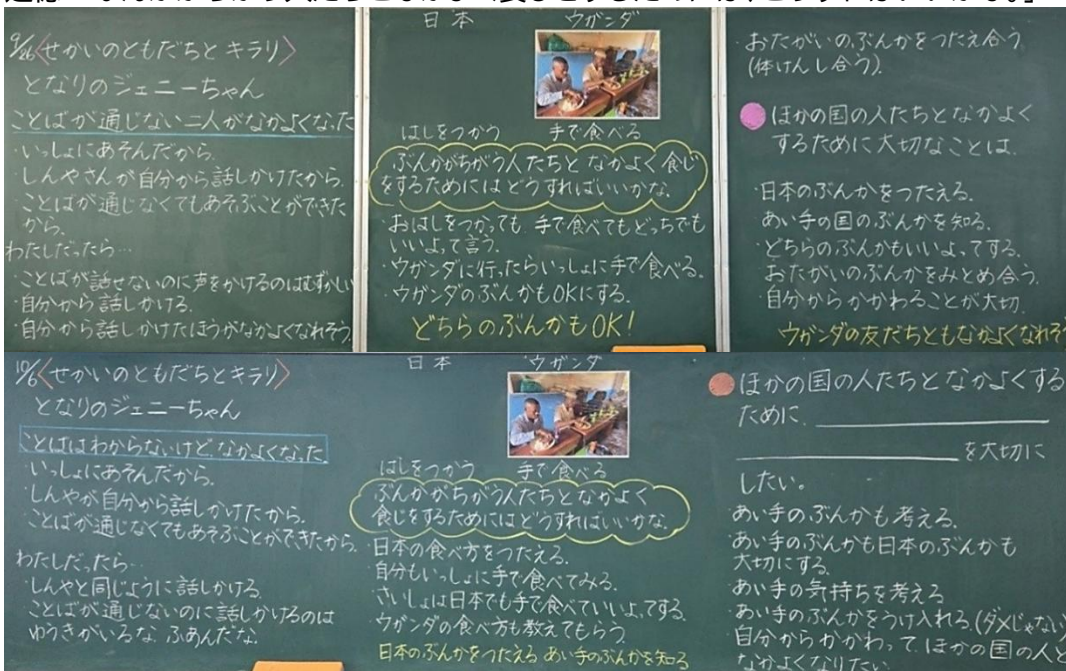
学級活動「同じところやちがうところはどこかな。」



- ・違うところしかないと思ったけど、写真をよく見たら、「いいね！」や同じところを見つけられました。今日は見つけられた数が少なかったのもっと見つけたいです。
- ・違うところばかりだと思っていたけれど、日本と同じところなどがたくさんあった。将来の夢が同じでうれしかった。
- ・日本と違うとこだけかと思ったら、いいところや同じところなどもあって、ウガンダもいいなと思いました。
- ・今日の授業で分かったことは、ウガンダは日本が使っている車を使っていて、とても仲がいいんじゃないかと思います。もっとウガンダのことを知ったら、もっとウガンダと仲よくできてうれしいなと思いました。
- ・日本と同じところもあるし、違うところもあって、おもしろいと思いました。日本のものがたくさん使われているのに気づきました。今後は、ウガンダのことをこれ同じだなと思いながら生活したいです。
- ・同じところをたくさん見つけられて、ウガンダの人と友達になれると思います。

【第5時の振り返り】

道徳「ぶんかがちがう人たちとなかよく食じをするためには、どうすればいいかな。」



- ・他の国の人たちと仲良くするために大切なことは、認め合いやこれはこう食べるんだよと教えてあげることです。一緒にごはんを食べて、話しかけて他の国の人と友達になりたいです。
- ・他の国の人たちと仲良くするために大切なことは、お互いの文化を尊重し合って、違うところがあったらどちらの文化もいいよとすること。
- ・他の国の人と仲良くするために、相手の文化も大切にしながらお話する。
- ・他の国の人と仲良くするために、相手の気持ちも自分の気持ちも大切にしたいです。他の国の人とも友達になりたいです。
- ・他の国の人たちと仲良くするためには、相手の気持ちを考えて話したいです。仲良くなったら、日本の文化を教えて、外国の文化も知りたいです。あと、勇気をもって話すことです。これを生かして外国の人と仲良くなりたいです。
- ・他の国の人たちと仲良くするために、相手の気持ちを考えて、相手の文化も知ることを大切にしたいです。他の国の人と話してみたいです。言葉が通じなくても、自分から関わって仲良くなりたいです。
- ・他の国の人と仲良くするために、相手の文化も日本の文化も大切にしたいです。これからもいろいろな国の人と仲良くしたいです。
- ・他の国の人たちと仲良くするために、自分たちの文化だけじゃなくて、他の文化も受け入れてみたり、自分から関わることを大切にしたいです。
- ・他の国の人たちと仲良くするためには、相手の国の文化や気持ちも考えるといいと思いました。言葉がしゃべれなくても、行動で表せば、どんな国の人に来て仲良くなれるんじゃないかなと思いました。

【第6時の振り返り】

外国語活動「ウガンダのともだちとなかよくなれるかな。」

- ・ウガンダの友達に質問したとき、思ったよりも自分たちと同じところがあった。しかも、言葉が話せなくても、身振り手振りだけでつながれたから、もっと世界の友達と通じ合いたいです。
- ・ウガンダの友達が手を振り返してくれました。いろいろ質問できて楽しかったです。これからもウガンダの人や他の国の人と話したいです。
- ・ウガンダの人たちは日本語を話さないけど、日本の私たちと同じところがいっぱいあってびっくりしました。
- ・将来の夢とかを話せて、ぼくと同じ「パン屋さん」って言っていた子がいたから、ちょっとだけ仲良くなれたかもしれない。これからは、外国の人でも、まずは英語が話せなくても、ちょっと話しかけて仲良くなりたいです。
- ・ウガンダの友達と仲良くなれました。今度、こっちも歌を歌ってお返しをしたいです。他の国の人とも仲良くしたいです。
- ・ぼくはちょっと緊張していたけれど、やってみれば楽しくて、ちょっとは仲良くなれたと思いました。次はもっと友達になれたらいいなと思っています。いろいろな国の人とも話したいです。
- ・言葉が話せなくても仲良くなれてうれしかったです。他の国の人と初めて話しました。もっとたくさん他の国の人と話したり、いろんなことを聞いたりしたいです。
- ・ウガンダの人とオンラインで話して、手を振ったり、質問したり、質問に答えたりして楽しかったし、少し仲良くなれました。次は、もっと仲良くなりたいです。

10. 自己評価

① 成果が出た点

- ・第1時の「せいかいにはどんな国があるのかな」では、子どもたちの振り返りから、世界一周旅行クイズを通して、子どもたちが世界の言語(あいさつ)や料理、動物などに興味をもち、世界の国やウガンダについてもっと知りたいという思いを高めたことがうかがえた(第1時の振り返り参照)。
- ・第2・3時のウガンダやアフリカの文化体験では、子どもたちの振り返りから、よさや大変さなど、様々なことを感じ取っていたことが分かる(第2時の振り返り参照)。もの運びや水運びを体験したり、ゲストティーチャーからアフリカの楽器の演奏方法を教わったり、アフリカ布にふれたりす

ることを通して、子どもたちが新たな文化に興味をもったり、様々な気付きがあったりしたことは成果の一つといえるだろう。また、文化の違いを「よさ」として捉えることができたのは、「違い」を受け入れる土台づくりにつながったと考える。

- ・第4時では、これまで「違い」にばかり目を向けていた子どもたちが、「同じところ」にも目を向けることができた。2年生ということもあり、「黒板がある」「野菜が売っている」など表面的なことが多く挙がったが、「日本と同じ車が走っている」など、ウガンダの生活の中にも日本とのつながりがあることを知り、ウガンダをより身近に感じることができたようである。
- ・第5時の道徳の授業では、振り返りにもあるように、小学校低学年の子どもたちなりに、国や文化のことなる人たちと仲良くするために大切なことを考える姿があった。小学校低学年の時期であっても、このようなことを自分事として捉え、考えていくことは、「地球市民」としての感覚の芽生えにつながったのではないかと考える。
- ・第6時のあしながウガンダとのオンライン交流では、言語で通じ合うことが難しくても、身振り手振りやリアクションで、積極的に関わろうとする姿が見られた。また、簡単な英語を用いて質問のやり取りを行ったときには、「好きな教科が同じだった」「将来の夢が同じだった」などと、ウガンダに住む子どもたちも自分たちと同じように遊んだり笑ったりしていることに気付き、少しは世界とつながっている感覚を育むことができたと考える。

② 苦労した点

低学年の子どもたちは、教師が提示するものに興味をもち、様々なことを知りたいという思いがあったが、授業で扱うことができたのはその一部に過ぎなかった。子どもたちの興味・関心や学習へのモチベーションを大事にしながらも、どの写真を提示するか、どの情報を与えるかを選ぶことが難しかった。また、道徳の授業では、低学年の内容を少し超えた課題となったため、子どもたちからの意見を引き出すのが難しい場面もあった。子どもたちが自分事として捉えられるように、子どもたちへの発問の仕方を工夫する必要があると感じた。

③ 改善点

異なる国や文化について学ぶ際に、子どもたちが「違い」に気付き、自国や自国の文化のよさを改めて認識できるのはよいことである。本単元の途中でも、子どもたちから「日本でよかった」との発言が聞かれたが、一步間違えると、優劣を付ける見方になってしまうこともある。そのため、「違い」も「よさ」として捉えられるような内容も積極的に取り入れたり、「違い」を受け止められるような授業展開にしたりする必要がある。また、道徳の授業では、少し難しい課題に取り組んだことで、普段の道徳の授業よりも子ども同士の対話が少なくなってしまうクラスもあった。子どもたちが自分事として捉え、自分の意見をもち、子どもたち同士でも十分に話し合うことができるような発問や授業展開を考えていきたい。

④ 自由記述

今回、学年スタッフの理解を得て、学年全体で国際理解教育の授業に取り組むことができたことは、意味のあることだったと思う。今年度の取り組みで終わるのではなく、様々な教科・領域の学習と関連付け、小学校6年間の教育活動全体で体系的に取り組めるような計画を作成し、様々な教員が普段の授業の中で国際理解教育を取り入れていけるようにしたい。

11. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取組

- ・校内にウガンダコーナーを作成した。
→ウガンダクイズ、ウガンダのお金、ウガンダについての記事等を掲示した。また、子どもたちが実際に楽器やクラフト、アフリカ布、ウガンダの子どもたちからのメッセージなどに触れられるようにした。



- ・学年会で授業の打ち合わせを行い、学年職員で共通理解を図り、学年職員に授業の補助をしてもらったり、学級担任に授業を行ってもらったりした。
- ・全職員に本単元の学習案を配付し、自由に授業を参観してもらえるようにした。
- ・電子連絡帳にて、保護者に子どもたちが学習した内容や様子(写真)を伝えた。
- ・本単元の授業を茨城大学教育学部の学生(教育実習生等)に公開した。

12. 自由記述

ウガンダでの教師海外研修では、初めて知ること、初めて見るもの、初めて体験することが多く、物事に対する視野が広がったり、物事の見方が変わったりすることを実感し、本当に学びの多い研修となった。本実践でも、ウガンダを通して、子どもたちに様々な気付きがあり、学習前よりも異文化理解や多文化共生を自分事として考えられるようになったり、思考の深まりが見られたりするようになったと感じる。そのため、私自身が教師海外研修で学んだことを少しは子どもたちに還元することができたのではないかと思う。今後も、私自身が学んだことを子どもたちに還元できるよう、様々な場面で国際理解教育の授業を実践していけるようにしたい。

13. 参考資料

資料名	著者名等	出版元、URL 等
JICA 中部教師海外研修 ガイドブック	執筆・編集 NPO 法人 NIED・国際理解教育センター	独立行政法人国際協力機構 中部センター